年6月）
（21）石川徹氏「葵の上の生涯」（『講座源氏物語の世界』第三集　有斐閣　昭和56年2月）
（22）拙稿「夕霧〈不在〉の論理―夕霧の機能と物語の〈二層〉構造―」（「国語国文」第七十四巻第十号　平成17年10月）
（23）井野葉子氏「手習巻の引板―歌ことばの喚起するもの（二）」（『源氏物語宇治の言の葉』森話社　平成23年4月）

典文学大系　源氏物語』に拠る。なお、『新大系』本の底本は大島本であり、それを欠く浮舟巻のみ明融本である。

（6）伊井春樹氏『源氏物語引歌索引』笠間書院　昭和52年9月
氏が取り上げておられる注釈書は以下の三十種。『源氏釈』（前田家本）『源氏釈』（宮内庁書陵部蔵桐壺～明石巻残欠本）『源氏釈』（宮内庁書陵部蔵「源氏物語注釈」所収本）『奥入』『原中最秘抄』『紫明抄』『異本紫明抄』『源氏物語古註』『河海抄』『花鳥余情』『弄花抄』『一葉抄』『細流抄』『休聞抄』『紹巴抄』『孟津抄』『花屋抄』『岷江入楚』『湖月抄』『源氏物語引歌』『源註拾遺』『源氏物語新釈』『源氏物語玉の小櫛』『源注余滴』『日本古典全書源氏物語』『対校源氏物語新釈』『源氏物語事典』（「所引詩歌仏典」）『日本古典文学大系源氏物語』『源氏物語評釈』『日本古典文学全集源氏物語』

（7）伊井春樹氏「『源氏物語』における引歌表現の効用」（『源氏物語論とその研究世界』風間書房　平成14年11月）

（8）（7）に同じ

（9）拙稿「夕霧の元服と光源氏―光源氏と夕霧を切り離す力―」（「宇部工業高等専門学校研究報告」第五十八号　平成23年3月）

（10）野口元大氏「夕霧元服と光源氏の教育観」（『講座源氏物語の世界』第五集　有斐閣　昭和56年8月）

（11）塚原明弘氏「『少女』巻の五節―夕霧のかいま見をめぐって―」（『源氏物語と古代世界』新典社　平成9年10月）

（12）久富木原玲氏「浮舟―女の物語へ―」（『人物で読む『源氏物語』』第二十巻　勉誠出版　平成18年11月）

（13）小嶋菜温子氏「『源氏物語』と〈罪〉の系譜―批評の成り立ちへ―」（『源氏物語と文学思想　研究と資料』武蔵野書院　平成20年3月）

（14）（1）に挙げた一連の拙稿など。

（15）拙稿「宇治十帖〈解体〉と〈閉塞〉の論理（上）・（下）」（「詞林」第四十一号　平成19年4月・「詞林」第四十二号　平成19年10月）
（16）の拙稿とともに、宇治との関わりによって薫の栄華の質が〈解体〉される仕組みについて考察している。

（16）拙稿「『夜ごとに十五日づつ』通う夕霧―浮舟の機能と物語の〈二層〉構造―」（『古代中世文学論考』第二十集　新典社　平成19年10月）

（17）石原昭平氏「英明なる重鎮・左大臣―賜姓源氏の「帝になり給ひ」「ぬべき君」に賭ける―」（『源氏物語作中人物論集』勉誠社　平成5年1月）

（18）伊井春樹氏「葵上の運命」（『源氏物語論とその研究世界』風間書房　平成14年11月）

（19）吉井美弥子氏「葵の上の『政治性』とその意義」（『読む源氏物語　読まれる源氏物語』森話社　平成20年9月）

（20）拙稿「葵巻〈連鎖〉の論理（上）・（下）」（「語文」第九十五号　平成22年12月・「語文」第九十六号　平成23

おわりに

〈薫〉→［浮舟］＝八宮の「忍草」〉、そして〈光源氏〉→［夕霧］＝葵上の「忍草」〉という、源氏物語中唯一、後撰歌Xによって引き結ばれた「重なり」。そして、浮舟と夕霧という「重なり」。物語は、薫が浮舟を八宮の「形見」と定位すること、そして、光源氏が夕霧を葵上の「形見」と定位することを、定位する視点者である薫と光源氏の、それぞれの権力体制に対する、いずれも「負のエネルギー」の発生と関わらせて描いている。それら「負のエネルギー」の内実やその相対化の方法に差違こそあれ、浮舟、夕霧という、薫や光源氏の権力のありかたに何らかの制限を与える力の存在を、当の薫や光源氏の目に焼き付けさせるべく、それらは共に機能しているのである。

後撰歌Xが、〈二層〉の併存を堅持するこの物語の論理に則って選び取られた、いわば、「〈二層〉構造」の論理の一端を反映した引歌として、宿木巻A、葵巻Bの両場面に立ち働いている可能性は極めて高い。但し、他の引歌表現にも同様の機能を果たすものがあるか、あるいはこれのみが特殊なのか、特殊だとすればなぜなのか、未だ検証途上であるゆえ、今回は「可能性」の指摘に留めたい。

〈注〉

（1）拙稿「夕霧〈不在〉の論理―夕霧の機能と物語の〈二層〉構造―」（「国語国文」第七十四巻第十号　平成17年10月）、「夕霧〈太政大臣予言〉の論理―〈夕霧権力体制〉の誤算と物語の〈二層〉構造―」（「国語国文」第七十六巻第六号　平成19年6月）、「『夜ごとに十五日づつ』通う夕霧―浮舟の機能と物語の〈二層〉構造―」（『古代中世文学論考』第二十集　新典社　平成19年10月）、「宇治十帖〈解体〉と〈閉塞〉の論理（上）・（下）」（「詞林」第四十一号　平成19年4月・「詞林」第四十二号　平成19年10月）など。

（2）本稿中に引用する『後撰集』と『拾遺集』の和歌本文は、角川書店『新編国歌大観』に拠る。

（3）片桐洋一氏『歌枕歌ことば辞典増訂版』笠間書院　平成11年6月

（4）鈴木日出男氏は、「既成の和歌の一、二句程度を示して、その和歌全体を相手に想起させる」ものとして「引歌」表現を定義され（『源氏物語の文章表現』（至文堂　平成9年5月））、「暗黙の了解」に立脚する「歌の言葉の機知的な機構」であると説いておられる（『源氏物語引歌綜覧』風間書房　平成25年5月）。

（5）引用の源氏物語本文及び頁数は、岩波書店『新日本古

確かであろうが、それ以上に、光源氏の立場からしてみれば、この縁談は、権門や皇族との姻戚関係が生じる、政治的に有効なそれであったろう。しかし、夕霧は光源氏の意向に反し、あくまで雲居雁との結婚に拘泥する。雲居雁は、夕霧にとって「系図の繁茂」を専ら担う人物、いわば〈夕霧権力体制〉の核であった。つまり、夕霧は、自身の権力体制のため、光源氏から権門や皇族との連繋の可能性を消し、結果、光源氏の面目をも潰しつつ、「光源氏権力体制」のありかたに制限を与えるのである。

このように、夕霧の出現は、光源氏にとって「好材料」とばかりは言えず、むしろ、物語世界における光源氏の権力のありかたに制約を加え、その絶対化を阻止する負のエネルギーの発生を意味していると考えるべきなのである。

夕霧が葵上の「形見」として光源氏の目によって定位されるということは、薫の場合同様、「負のエネルギー」が、文字通り、光源氏の目の前に配された、ということになろう。だとすれば、このことが意味するのは、権門との公的な「系図上の連繋」による権力体制、いわば「系図の繁茂」による栄華があり得ない未来、そして、「光源氏権力体制」の絶対化があり得ない未来、なのではないか。光源氏が、その目で夕霧を葵上の「形見」と定位すること、そこには、光源氏に「系図の繁茂」による権力機構生成の可能性が開かれていないということ、そして、〈夕霧権力体制〉によって、「光源氏権力体制」の絶対化が阻まれ続けるということが、実に象徴的に示されていると考えるべきなのである。

引歌表現の意義について、井野葉子氏は、「作中人物の無意識の深層心理を引きずり出」すことと、「作中人物のあずかり知らぬ運命を予告」することの二点を挙げておられる[23]。本稿は、物語の統括にかかる規則や仕組みについて考えるものであり、従って、前者については賛同し得ないが、後者については当然あり得ると思う。無論、それは引歌表現に限定されるものではなかろうが、作り手の仕掛ける様々な方法で、物語の未来は暗示され、そして、一定の展開へと誘導されていくのであろう。少なくとも、宿木巻Aと葵巻Bの引歌表現が、「様々な方法」の一つとして、「〈二層〉構造」の論理に則りつつ、この物語の「誘導」に関わっている可能性は十分あると思うのである。

光源氏と左大臣家を繋げ続ける役割を指摘された[21]が、文字通り、光源氏にとって、夕霧は、左大臣との関係を再び結び付けてくれる「好材料」に映っただろう。現に、賢木巻には「大将（光源氏）はありしに変はらず渡り通ひ給ひて、さぶらひし人人をも、中〳〵にこまかにおぼしをきて、若君（夕霧）をかしづき思きこえ給へる事限りなければ、あはれにありがたき御心と、いとゞいたつききこえ給事ども、同じさまなり」（賢木巻三五六頁）とあって、「若君」夕霧の存在ゆえに、光源氏が左大臣邸にかつてと同じように出入りできているさまも窺える。ということは、光源氏への実質的な支援のルートは残存していることになろう。つまり、葵上の死は、光源氏にとって、公式な姻戚関係に立脚した連繋のみが、言い換えるなら、権門左大臣家との系図上の連繋のみが、断ち切られたことを意味するのである。

ここで疑問がある。確かに、「夕霧の誕生」は、光源氏に今後も左大臣家と繋がる機会を与えた。しかし、光源氏にとって、本当に夕霧の存在は「好材料」だったのだろうか。

前に、「〈二層〉構造」の論理について要約を掲げた。権力構造の観点からは、夕霧は、一貫して光源氏の「対照的〈一対〉」であり、「光源氏権力体制」と相容れない〈夕霧権力体制〉を生み出す存在である。夕霧は、光源氏に対するアンチテーゼとしてあり、光源氏の絶対化を阻止し続ける存在であった[22]。そもそも夕霧は、物語に記される初めての心中描写で、いきなり光源氏に対する不満を吐露する人物である。光源氏の処遇に対して、「いぶせきまゝに、殿を、つらくもおはしますかな、かく苦しからでも、高き位にのぼり、世に用ゐらるゝ人はなくやはある、と思」っていたのだ（少女巻二八六頁）。玉鬘と戯れる光源氏の姿を「あなうとまし」と評したり（野分巻四八頁）、落葉宮との合奏をたしなめる光源氏を、逆に「さかし、人の上の御教へばかりは心つよげにて、かゝるすきはいでや」と批判したり（横笛巻六三頁）、夕霧は、この物語において、光源氏を否定的に相対化するよう働いている。また、梅枝巻でも、光源氏の勧める右大臣の娘や中務の宮との縁談も「たはぶれにてもほかざまの心を思ひかゝるはあはれに、人やりならずおぼえ給ふ」（梅枝巻一六八頁）と目もくれず、雲居雁との結婚しか頭にない姿を描かれていた。光源氏の面目が潰れたことも

子氏は、葵上の呼称が多く「大殿」とされる点に注目され、葵上との結婚よりも、むしろ左大臣家の婿になる政治的重要性について説かれた[19]が、言われるとおり、確たる後見のいなかった光源氏にとって、葵上は、権門左大臣家との「政治的」連繋を叶えるキーパーソンであった。葵上は、この「連繋」の根拠だったわけである。だとすると、葵上の死の意味するところは、まずは左大臣家との連繋の断絶ということになる。

確かに、物語も、葵上の死後、光源氏と左大臣との表立った繋がりを禁じているようだ。例えば、光源氏の須磨退去直前、左大臣に挨拶に訪れる場面には、「二三日かねて、夜に隠れて大殿に渡り給へり。網代車のうちやつれたるにて、女車のやうにて隠ろへ入り給」（須磨巻六頁）とあり、光源氏の微行するさまが記されるが、これなど光源氏がかつてのように左大臣と関わることができない状況を如実に伝えている。右大臣専横の時勢にあって、朧月夜の一件で右大臣方からにらまれている光源氏としては、葵上が存命ならともかく、そうでない今、右大臣方のライバル左大臣家に悠々と出入りするわけにいかない、ということだろう。

他に「朧月夜の一件」と無関係な例を一つ挙げておく。左大臣の子息で、頭中将の弟に蔵人弁という人物がいる。夕顔の急死で体調を崩した光源氏を頭中将と共に見舞ったり（夕顔巻一二九～一三一頁）、あるいは北山で療養中の光源氏を、これも頭中将と共に迎えに行ったり（若紫巻一六九～一七〇頁）、左大臣邸で光源氏と合奏したり（花宴巻二八頁）と、幾度もかなり近しい様子を描かれていた人物である。にも拘わらず、葵巻以降、一切光源氏との関わりが描かれなくなるのだ。朧月夜事件が明るみに出る賢木巻以降なのであれば、右大臣方に憚ったということにもなろうが、既に葵巻で描かれなくなっているのである。これなど、葵上の死が、光源氏と蔵人弁の親交を切り離す要因であったことを示唆しているようである。やはり、物語は、葵上の死が、光源氏と左大臣家との「連繋」を、本来断絶させるものとして前提しているようだ。

ところが、「葵上の死」と引き替えるように「夕霧の誕生」が描かれる。光源氏と葵上の結婚十年後という不自然な設定で「夕霧の誕生」が「〈連鎖〉」するのである[20]。夕霧は母方の左大臣邸で養育されることになる。早く石川徹氏は、葵上に、夕霧出産によって

れることになる。そのような状況で浮舟が登場したわけである。薫にとって浮舟は、断絶するはずだった「宇治」との繋がりを復活させる好材料に映ったことであろう。現に、この後も薫は浮舟を「宇治」に移し据えて通うことになる。しかし、薫にとって「好材料」に見えたこの浮舟という存在は、果たして本当に「好材料」だったのだろうか。

私はかつて、薫にとって「宇治」が、薫に本来あり得た栄華を〈解体〉する「反栄華」の力として働く点について述べた[15]。例えば、明石中宮腹女一宮との結婚を強く望んでいたにも拘わらず、薫は、なぜか「宇治大君と似ているかもしれない」と考えて、明石中宮腹でない女二宮の降嫁を承諾する。「宇治」に拘泥することによって、薫は、その栄華の質を弱体化させたと言えよう。今、薫が浮舟に通うことで、薫の都での生活時間が様々な点で削られることになる。結婚や御子の誕生といった、権力拡大に必須の動きも制約されてくる。現に、浮舟に通い始めた後、薫は、他の女君と結婚もしないし、御子の誕生もない[16]。つまり、薫の権力体制、〈薫・匂宮・冷泉連繋体制〉にとって、浮舟の出現は、「好材料」どころか、〈解体〉方向のベクトルで働く負のエネルギーの発生を意味するのである。

浮舟が八宮の「形見」として、薫の目によって定位されるということは、そういった「負のエネルギー」が、改めて薫の、文字通り、目の前に配された、ということなのではないか。だとすれば、そのことが意味するのは、権力〈解体〉の力源としての「宇治」の力、そして、浮舟の力が、薫に関わる今後の物語展開に貼り付いていくということ、即ち、〈薫・匂宮・冷泉権力体制〉を〈解体〉する力が、更に持続するということなのではないか。薫が、その目で浮舟を八宮の「形見」と定位すること、そこには、〈薫・匂宮・冷泉連繋体制〉を〈解体〉する力が、この物語内部に働いていることが示されていると考えるべきなのである。

では、次に光源氏と葵上について検討しよう。光源氏にとっての葵上とは、初めて正妻のポストに就いた女君であると同時に、左大臣家との繋がりを生み出した存在と言える。石原昭平氏は、この成婚が桐壺帝の内意に基づく左大臣の決断によるものであること指摘され[17]、伊井春樹氏は、桐壺帝と左大臣の政治的な夢の結合を見て取っておられる[18]。また、吉井美弥

を与えたのだろう。対峙するに値する資格として二様の「同質」の力を与えられている、と言い換えても良い。もしこの仮説に一定の妥当性があるならば、宿木巻A、葵巻Bの両場面の「重なり」にも、この物語の「〈二層〉構造」と切り結ばれる、何らかの意味が秘められていると推定されよう。では、我々は、一体ここに何を見通すことができるのであろうか。

二　薫対浮舟、光源氏対夕霧

宿木巻A、葵巻Bを再び引用する。

A　宮の忍びてものなどの給ひけん人の、忍草摘みをきたりけるなるべしと見知りぬ。

〈薫↓［浮舟］＝八宮の「忍草」〉

B　若君を見たてまつり給にも、何に忍ぶのと、いとゞ露けゝれど、かゝる形見さへなからましかば、とおぼし慰む。〈光源氏↓［夕霧］＝葵上の「忍草」〉

前にも述べたとおり、宿木巻Aでは、薫が、浮舟を八宮の「忍草」（「形見」）と措定し、また、葵巻Bでは、光源氏が、夕霧を葵上の「忍草」（「形見」）と措定した。言い換えるならば、宿木巻Aでは、薫の眼前に浮舟が八宮に代わって配され、葵巻Bでは、光源氏の眼前に夕霧が葵上に代わって配されたことになる。そこで、そもそも八宮の存在やその死が、薫にとってどのような意義を持つものとしてあるのか、そして、そもそも葵上の存在やその死が、光源氏にとってどのような意義を持つものとしてあるのか、それぞれ検討した上で、その八宮に代わって浮舟が薫の前に配される意味、そして、葵上に代わって夕霧が光源氏の前に配される意味について考えることにしよう。

まず、薫と八宮について検討する。薫にとっての八宮とは、薫を宇治に導く存在であったと言って良いだろう。八宮の俗聖という独特のありかたが、出自に不安を抱える薫の心を捉えるのであり、薫はそれゆえ宇治に通うのであった。とすれば、八宮の死の意味するところは、まず何より薫と「宇治」との繋がりの断絶であろう。無論、当の八宮が、娘たちの後見を依頼したことで、薫はしばらく「宇治」に赴いてはいる。しかし、その「後見」対象である中君が匂宮と結婚したことで、薫が宇治に出向く必然性は、やはり断ち切ら

力源は、藤壺との「罪の恋」に由来する冷泉の存在や、その冷泉を守るべく赴いた須磨明石に由来する明石姫君の存在であって、いわゆる政略結婚による他権門との連繋ではない。対する〈夕霧権力体制〉の力源は、雲居雁との「恋」とその子女達の政略結婚に由来する他権門や皇族との連繋であり、いわば婚姻関係の拡大による「系図の繁茂」にある。源氏物語において、これら対照的な権力体制は、相容れることなく、あたかも〈二層〉を成すように併存している。光源氏と夕霧とは、それぞれの〈層〉の維持のために物語世界を生かされる。光源氏と夕霧の世代が重ならないことで、いずれもが政界のトップに君臨でき、序列化をも免れうる。つまり、頭中将と光源氏ではなく、夕霧と光源氏こそが「対照的〈一対〉」であり、この物語は、二様の「対照的」な「栄華」のありかたを生かされる〈源氏〉の物語なのである。「光源氏権力体制」は〈薫・匂宮・冷泉連繋体制〉によって引き継がれ、この〈二層〉は堅持されるが、物語第三部では、浮舟に主導された宇治の力によって、〈二層〉は、共にその栄華のレベルを弱体化させてしまう。薫や匂宮の目が浮舟によって長期的に都から遠ざけられることで、彼らの栄華は〈解体〉するし、また、彼らのうち、特に匂宮を政略結婚の対象としている夕霧にとっても、六の君を通じた「系図の繁茂」の可能性が〈解体〉する。光源氏と夕霧に起因する権力体制と、それぞれ対峙し、そのいずれをも共に〈解体〉し、〈二層〉の並行を消耗戦のごとく〈閉塞〉させる力を有する点において、浮舟は、光源氏と、そして夕霧と、同格に屹立する力を付与されていると考えられる。いわば、浮舟も、光源氏や夕霧同様、この物語の展開を規制する強大な力を付与された「中心」なのである。――

物語の展開が、常に一定の条件を満たし、それを逸脱しないよう制御する「〈二層〉構造」の論理。その論理に即して物語世界を生かされる「中心」としての三者の存在。そして今、様々に符合する浮舟と夕霧という「重なり」と、浮舟と光源氏という「重なり」。そうあってみれば、それら「重なり」の意味は、この論理の存在と無関係でないことが仮説されないか。

浮舟は、〈閉塞〉のため、光源氏の権力体制と対峙せねばならず、そして、光源氏とは全く異質の夕霧の権力体制とも対峙せねばならない。だからこそ物語は、それぞれの組み合わせに、それぞれ異なった「同質性」

いと思う。全例逐一分析を行いたいところではあるが、今は先を急ぐ。確認しておくべきは、浮舟と夕霧という人物が、確かに幾重にも「重なり」「共通性」を設定されているらしいこと、である。

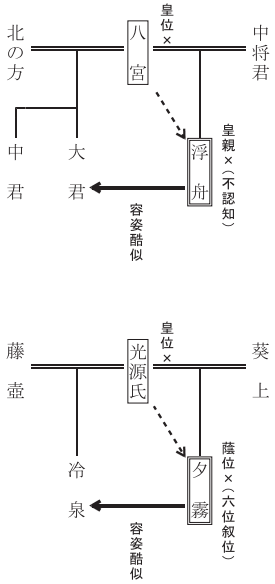
では、なぜ浮舟と夕霧なのだろうか。当然ではあるが、そもそも、浮舟と男性登場人物との「重なり」について問われることは、先行研究においても決して多くない。ましてや夕霧とのそれは、前にも述べたとおり、まずなかった。ただ、稀に光源氏との「重なり」について指摘されることはあった。近時も、久富木原玲氏は、浮舟と光源氏にのみ「人形」という語が用いられる点や、両者が「かぐや姫」になぞらえられる点等の「同質性」を指摘され[12]、また、小嶋菜温子氏は、「かぐや姫―光源氏―浮舟」という「〈罪〉の系譜」を見通された[13]。両氏とも、「女」や「罪」といった、物語の主題性ゆえの両者の「重なり」を読み解いておられて説得力がある。が、しかし、これについても、詳細は前の夕霧の件共々別稿で考えるとして、今は深入りせず先を急ごう。今確認しておきたいのは、両氏が指摘されるとおり、浮舟と光源氏も、どうやら「重なり」を、しかし夕霧とはまた異なる「個性」の「重なり」を設定されているらしい、という事実である。

浮舟と夕霧という組み合わせ。そして、浮舟と光源氏という組み合わせ。

私は、かつて、源氏物語の展開が「〈二層〉構造」という仕組みによって一貫して制御されていると述べた。短篇的要素を含み持つ巻々の点在ゆえか、あるいは、多様な主題性の存在ゆえか、これまで源氏物語全体を統括する構造的な法則性について定位されることはあまりなかった。しかし、私は、源氏物語には「〈二層〉構造」を堅持するという論理が存在し、それに則って物語展開が規制されていると考えた。言い換えるなら、「〈二層〉構造」が破綻なく維持されるという大きな枠組みに沿って、人物の属性の設定や事件の進行が必然化している、と考えたのである[14]。要約しておこう。

――都には、対照的な二つの権力体制が存在し、この物語は、その一方が絶対化することを認めない。二つの権力体制のうち、一つは、光源氏を主人公にした「罪の恋と栄華」に関係する「光源氏権力体制」で、もう一つは、夕霧を主人公にした「恋と栄華」に関係する〈夕霧権力体制〉である。「光源氏権力体制」の

【系図】



一つ目の符合は、両者が、「八宮」「光源氏」という皇位継承権を剥奪された父を持つ点である。光源氏は言うまでもなく、八宮もかつて冷泉東宮廃立運動と関わって、皇位継承の可能性を絶たれている。桐壺帝前史はさておき、少なくとも物語内では、何らかの事情により皇位継承の可能性を剥奪されるのは光源氏と八宮のみである。

二つ目の符合は、両者とも、その父の意向によって、本来あり得た地位を奪われている点である。浮舟には、皇親として生きる可能性があった。ところが、八宮は、「あいなくわづらはしくものしきやうにおぼしなりて、又とも御覧じ入るゝこともなかりけり」（宿木巻九〇頁）と、浮舟の認知を断固拒絶したのであった。夕霧は、少女巻に「四位になしてんとおぼし、世人もさぞあらんと思へる」（少女巻二八一頁）とあるとおり、光源氏も「世人」も四位叙位を想定していた。ところが、自己の人格的厚みを演出する機会にもしたい光源氏の政治的目論見[9]と関わって、学問重視を全面に押し出した処遇に変更され、夕霧は、「実際上貴族社会の最下位」とされる六位に落とされた[10]のであり、「蔭位制によって認められていた権利を放棄」させられた[11]のである。

三つ目の符合は、別腹の兄姉との酷似を言われて物語に登場する点である。浮舟は、中君に「あやしきまでむかしの人（大君）の御けはひに通ひたりしかば…」（宿木巻八三頁）と言われて物語に浮上してくるし、また、夕霧は、「若君（夕霧）の御まみのうつくしさなどの、春宮（冷泉）にいみじう似たてまつり給へる…」（葵巻三〇九頁）と定位されて、これも物語世界に登場してくるのである。

実は、これら以外にも浮舟と夕霧の符合はいくつか見られる。先行研究において指摘されることはまずなかったが、この両者の「符合」は、看過してはならな

また、源氏物語本文中に現れる「しのぶ」関連の自立語は、岩波『新大系』本の『源氏物語索引』によると、ちょうど四五〇例。うち、管見による限り、この後撰歌Xとの重なりが想定できそうなものは、語彙のレベル、場面状況のレベル等、多角的にそれぞれ全て確認しても、やはり、宿木巻A、葵巻Bの二例しかないようだ。この「2／450」という数字は注目に値しよう。

伊井春樹氏は、源氏物語の引歌表現について、「いずれも同じような場面に、類似した古歌を用いるのではなく、そこにそれぞれの個性が示される語り手の配慮がみてとれる」とされ、類似の場面状況においても、作中人物の「個性」に応じて様々な歌が引かれるという特徴があることを明らかにされた(7)が、それならなおさら、後撰歌Xが、源氏物語全編を通じて、この宿木巻Aと葵巻Bにのみ使用される意味は極めて重いと言わねばなるまい。「同じような場面」に、「類似した古歌」が、否、全く同じ「古歌」が、この二例にのみ使われるということは、つまり〈薫→［浮舟］＝八宮の「忍草」〉、そして〈光源氏→［夕霧］＝葵上の「忍草」〉という構図が、敢えて重ねられたものであると考えられるからだ。

就中、［浮舟］と［夕霧］の「重なり」には注目すべきであろう。「キーワード」たる「忍草」の語によって結び付けられ重ねられた唯一の組み合わせなのである。浮舟と夕霧の何らかの「個性」が、「重なり」を設定されているとの想像もなされてくる。

また、同じく伊井氏は、引歌と登場人物との関わりについて、「そこには明らかに語り手の意識が反映しており、それが人物造型にも及んでくる」(8)とされ、引歌の使われ方に、作中人物の人物像が左右される点、また、作り手の「意識」が「反映」される点について指摘しておられる。つまり、この「重なり」は「語り手の意識」によるもの、即ち作り手サイドの設定した人物造型上の共通性だということだ。浮舟と夕霧とは、敢えて「共通性」を設定されている人物だとも言えるのである。

このように考えたとき、他にもこの両者に関わって奇妙な符合が散見されることに気付く。次の【系図】を参照したい。

③　此君の御心ばへなどのいと思やうなりしを、よその物に思なしたるなんいとかなしき、など忘がたみをだにとゞめ給はずなりにけんと、…

（手習巻三四三頁）

まず、③は、小野尼君が亡き娘を思い起こすところであるが、ここは二重傍線部のとおり、「忘がたみをだにとゞめ給はず」とあって、そもそも「形見」となる子自体が存在していない。後撰歌Xとの構図上の重なりが成立しておらず、これを引歌と見ることには無理があろう。むしろ、『後撰集』一三九二番歌「たねもなき花だにちらぬやどもあるをなどかかたみのこだになからん」や、『拾遺集』一三一〇番歌「如何せん忍の草もつみわびぬかたみと見えしこだになければ」などの方がまだ近いように思われるところである。ともかく、『紹巴抄』のみ後撰歌Xを指摘しているが、他に同一見解はなく、『紹巴抄』の誤釈ということになろうか。

①は、光源氏が北山の僧都に若紫の素性を問う場面、②は、光源氏が薫を見て柏木を思い起こす場面である。①②とも、「故人」とその「形見」の存在、それを定位する視点者光源氏と揃っており、宿木巻A、葵巻Bの例と構図上は似ているのであるが、果たして後撰歌Xが引歌だと断じて良いのかどうか。「故人」とそれを偲ぶよすがが「形見」が話題になっているとは言え、後撰歌Xとの語彙レベルでの一致は、傍線部の「形見」のみである。『源氏釈』など後撰歌Xの初句を「むすひおく」とする古注釈も存在するので、この「結びおきし」のあたりに異文発生があったと見ても、宿木巻A、葵巻Bの例に共通してみられた「歌ことば」としての「忍草」に触れられていない点において、いわば、「キーワード」に触れられていない点において、①②も後撰歌Xの引歌表現とは認めにくいように思うのである。

どうやら各時代における享受のありかたも同様であったらしい。三十種のうち、①に後撰歌Xを認めるのが『休聞抄』『紹巴抄』『岷江入楚』の三種、同じく②に認めるのが『孟津抄』の一種のみであるからだ。念のため、宿木巻A、葵巻B、①②③の計五例について、三十種の注釈書のうち、何種が後撰歌Xに依拠すると捉えているか一覧にしておく。

A	B	①	②	③
20／30	25／30	3／30	1／30	1／30

B　若君（夕霧）を見たてまつり給にも、何に忍ぶのと、いとゞ露けゝれど、かゝる形見さへながらましかば、とおぼし慰む。（葵巻三一四頁）

傍線部、これも多くの古注が後撰歌Xを引歌としている。点線部、「形見」の語や「なからましかば」の反実仮想表現も、後撰歌Xの点線部と重なっており、ここがそれを踏まえた表現であることを裏付けていよう。解釈としては、「夕霧を見申し上げなさるにつけても、葵上の形見だと、たいそう涙ぐまれるが、もしこのような忘れ形見までもがいなければ（何を偲ぶよすがとできようか）、と慰みにお思いなさる」となろうか。ここの「故人」は葵上であり、「子」は言うまでもなく夕霧である。つまり、視点者である光源氏が、夕霧を、葵上の「忍草」即ち「形見」と定位する構図であり、これも〈光源氏〉→［夕霧］＝葵上の「忍草」〉と表しておくことにする。

さて、宿木、葵の両巻に、同じ本歌に依拠する場面が存在することを確認したのであるが、では、源氏物語中、他にこの後撰歌Xが引歌として組み込まれている場面はないのであろうか。伊井春樹氏は、『源氏物語引歌索引』で鎌倉から昭和まで計三十種の注釈書に指摘される引歌表現について集成しておられる(6)が、それによると、古注には、後撰歌Xを引歌と捉える場面として、この宿木巻A、葵巻B以外にも三箇所指摘がある。次に番号を付して引用してみよう。なお、以下、本稿においても伊井氏が取り上げられた三十種の注釈書を参照対象とする。当該表現を引歌表現と見做すか否かの享受傾向が一定把握できれば、本稿においては十分だからである。

①「いとあはれにものしたまふ事かな。それはとゞめ給ふ形見もなきか」と、おさなかりつるゆくゑのなをたしかに知らまほしくて問ひ給へば、…（若紫巻一六三頁）

②　親たちの、子だにあれかしと泣い給らんにもえ見せず、人知れずはかなき形見ばかりをとゞめをきて、さばかり思ひ上がりおよすげたりし身を心もて失ひつるよ、とあはれにおしければ、…（柏木巻三〇頁）

の草」は、「一首全体」のイメージを「昔を偲ぶ」意に「統括」する「歌ことば」として、いわばこの歌のキーワードとして働いていることになろう。本稿においては、このような特定のキーワードによって、本歌のイメージが喚起される表現を、引歌・引歌表現と定義する(4)。

後撰歌Xの解釈を施しておく。「産み残しておいた忘れ形見の子さえもがいなかったならば、何によって故人を偲ぼうか（忘れ形見の子がいるので、それをよすがに故人を偲べるのだ）」、となろうか。「子」を「故人」の「忍草」、すなわち、「偲ぶ種」たる「形見」であると詠者が視点者となって定位していると言えるだろう。

さて、源氏物語中には、この後撰歌Xの「イメージ」に依拠する表現、つまり後撰歌Xの引歌表現が二例のみ存在し、また、そこには実に奇妙な符合が見られる。本稿においては、それらが「〈二層〉構造」の論理に沿った本文徴表である可能性について、指摘を試みる。なお、本指摘は、引歌表現の極偏頗な事例に基づく。もとより、この物語の引歌表現全てに敷衍しうる性格のものでないことを付言しておく。

一　浮舟と夕霧と物語の〈二層〉構造

まず、宿木巻、宇治中君から異母妹浮舟の存在を知らされた薫の心中をAとして引用する。

A　宮（八宮）の忍びてものなどの給ひけん人の、忍草摘みをきたりけるなるべしと（薫は）見知りぬ。

（宿木巻八三～八四頁）(5)

傍線部、『奥入』『紫明抄』『河海抄』をはじめ、多くの古注が、後撰歌Xを引歌として指摘している。簡単に解釈を施しておくと、「八宮が密かに通じておられた女が、八宮の忘れ形見の子を産みおいていたのだろうと薫は合点した」となろう。無論、ここの「故人」は八宮以外ありえず、また、その「子」も浮舟以外あり得ない。浮舟を八宮の「忍草」、すなわち「形見」であると薫の視点から定位しているわけだ。薫が、浮舟を、八宮の「忍草」即ち「形見」と捉えている構図であり、ここでは仮に〈薫→［浮舟］＝八宮の「忍草」〉と表しておくことにしよう。

次に、葵巻、葵上の急死後、夕霧を見つめる光源氏の心中をBとして引用する。

浮舟と夕霧
―「忍草」と物語の〈二層〉構造―

中井賢一

はじめに

本稿は、源氏物語の〈二層〉構造[1]に関する補論の一つとして位置付けられるものである。この物語が「〈二層〉構造」に確かに制御されていると前提したとき、物語内のいくつかの謎が氷解しうることを、これまでも様々な事例とともに述べてきたが、今回は、いわゆる引歌表現に注目し、同様の試みを行うこととする。

X　結びおきしかたみのこだになかりせば何に忍の草をつまましし[2]

後撰和歌集巻十六雑二、「兼忠朝臣母のめのと」歌である。以下、後撰歌Xとしよう。「かたみ」は、「形見」と「筐」、「こ」は「子」と「籠」のそれぞれ掛詞となっている。また、「忍」「しのぶ」自体は、昔を偲ぶ意以外にも、隠れる意や我慢する意などを表す多義語であるが、片桐洋一氏は、この後撰歌Xも例示しながら、「忍草」が「和歌表現の前提となり、一首全体を統括する重要な歌ことば」として認識されていたこと、そして、平安中期まで「昔を偲ぶ」意以外の例が見出しがたいことを明らかにしておられる[3]。無論、ここの文脈においても「昔を偲ぶ」意として解釈すべきで、「忍の草」が「偲ぶ（種）」と植物「忍草」との掛詞となっていると限定できよう。即ち、「忍草」「忍